

タチアオイ（ハナアオイ）

牧 幸 男

梅雨の時期は、春から夏に移行する過程である。雨が多く、日照が少なくなるので憂鬱の日が続くが、7月に入り梅雨明けの頃になるとなんとなく嬉しいような気持ちになる。この時期に特に目立つ植物にタチアオ（立葵）がある。この植物の特徴は、梅雨が始まると花が下段から咲きはじめ、先端の蕾が咲き終わる頃梅雨が明けけるので「葵の咲き終わりが梅雨の終わり」と言い言われてきた。このためこの植物は「梅雨葵」と呼ばれることもある。



様々なタチアオイ（撮影：松本市内）

タチアオイはギリシア、クレタ島、小アジア（中国という説もある）原産地のアオイ科植物で、宿根性の多年草であるが、品種によっては一年草でもある。主に鑑賞用として普通人家に栽培されている。茎は円形、緑色の毛があり、高さ2.5m内外に直立する。葉には長い葉柄があり互生し、円形で基部は心臟形で、縁には鋸歯がある。梅雨の頃から葉腋に短い柄のある大きな美しい花をつけ、下から次々と咲き上がり、梢の部分では長い花序となる。園芸種が多く、花の色は紅、濃紅、淡紅、白紫等で、八重咲き、ピオニー咲き（芍薬のような咲き方）も生まれている。立葵の仲間は東半球に約15種生育し、アオイの名を冠した植物は『新訂牧野新日本植物図鑑』に、エノキアオイ、ハイアオイ、ゼニアオイ、ジャコウアオイ、フユアオイの記載がある。一度庭に播種すると繁殖力が強く驚かれる。

立葵は、『万葉集』(巻629～759)：「梨棗 葵に粟嗣ぎ延ふ田葛の後も逢はむと葵花咲く」を始め、『枕草子』(1001頃)、『源氏物語』(1001～1005)：「くやしきぞつみをかしけるあふひ草袖のゆるせる かざしならぬに」、『千載和歌集』(1188成立)、『雪玉集』(1537)等に収載され古くから親しまれたてきた植物である。このため詩歌に良く詠まれてきた。

人もみな かつらかざして 千早振る 神のみあれに あふひなりけり 紀貫之
咲き登る 梅雨の晴れ間の 葵かな 夏目成美



植物名は、平安時代は「唐葵」と呼ばれていたが、江戸時代以降今の「立葵」になった。牧野富太郎博士は「昔は一般にアオイと呼んでいたのはこの植物を指していたことが多い。日本名は立葵で花のついた茎がまっすぐに高く立つことによる。漢名は蜀葵しよくきである。」と述べている。別名は葵、花葵、梅雨葵、唐葵、コケッコウ花(北海道)、コケラッコ花(青森)が知られている。後述2種の植物名は、この花の付け根の部分か粘着性があるので、薄い花びらを引き抜き花弁を顔などに付けて鶏の鶏冠に見立てて遊ぶ事からかわいい名が生まれた。英名は Holly hock 聖地の意で12世紀頃の十字軍がシリアからこの花を持ち帰ったことに由来している。学名は *Althaea cannabina* で、属名はギリシア語の *althaino*(治療)が語原、種小名は大麻の意で薬草に使われることに由来ある。

立葵を利用するようになった歴史は、5万年前のイラクのシャニダール人の洞窟の中この種子やネアンデルタール人の埋葬地に、人骨と共に赤いタチアオイが発見されている記録が一番古い。恐らく、死者を悼む葬送にこの花が用いられたと考えられている。空に伸び次々と咲くこの植物の姿から、未来や希望を感じ、心の痛みを癒してきたのかもしれない。

我が国の使用はもっぱら鑑賞用利用が主であるが、ヨーロッパや中国では薬用植物として知られてきた。ローマ時代のガイウス・プリニウス・セクンドゥス(23~79?)著の『博物誌』(77)にウスベニタチアオイ(タチアオイ、プレイストロケイア等)が潰瘍や軟骨・骨の損傷の治療薬に、葉を水に漬けたものを飲むと便通にも効き、またその葉はヘビ・サソリなどの毒虫を追い払い、ハチの刺し傷を治す塗り薬としても利用の記述がある。その他、その葉を腰の下に敷いて分娩すると安産ですむ、種子は婦薬として効果がある等少々怪しい使用方法も記述されている事から魔法薬の一種でもあったのかと考えられる。現在もヨーロッパでは花や柔らかい若葉は、疲労回復や美肌、利尿効果、咳止め、二日酔いやむくみの回復に用いたり、特にハーブティーは愛用されている。

中国も立葵は古くから知られた植物で、『爾雅じが』(140以前)に「葉は葵に似て花は木槿花の如し」とあり、高く生育し紅花をつけるとして「一丈紅」とも記されている。薬用利用は無論、白菜の王、滑菜(葉物野菜の一種)として重要な蔬菜となっていた。生薬菜は、根を生薬名蜀葵根しよくきんと呼び、胃腸薬や利尿剤として、花を生薬名蜀葵と呼び皮膚炎に利用した。現在、薬用にあまり利用されず専ら鑑賞用となっている。

食用の歴史では、ウスベニタチアオイは英語で Marshmallow と呼ぶが、菓子のマシュマロと同じ言葉である。当初、根に含まれる多糖類から粘液を抽出し古代エジプトではナツメヤシの実で風味をつけ咽喉の痛みを和らげる薬として利用していたが、後に卵白や砂糖を加え、攪拌して作られたのがマシュマロのはじまりである。私が好む現在のマシュマロは「コーンシ・ロップ、澱粉、ゼラチン、砂糖」が原料である。蛇足だが、森永製菓の創設者、森永太郎氏は明治末にチョコレート、キャラメル、マシュマロの三種を最新の西洋菓子として宣伝したが、チョコレートとキャラメルは瞬時に普及し売り上げを伸ばしたが、マシュマロは如何したことかさっぱり売れなかったと述べている。

松本城の北の通り、松本神社の前に立葵が多く植えられている。この場所は旧町名「葵の馬場」と呼ばれていた。当時の藩主戸田氏が馬場の土手に葵を植えたことからこの名で呼ばれるようになったとのこと。現在、この場所には「たちあおい 旧葵の馬場町」の標識の他に、建設大臣から平成5年(1993)に「都市景観賞」が贈られた標識がある。都市景観賞には「この事業は全国街路事業促進協議会主催の第五回全国街路事業コンクールにおいて最も優れた事業と認められ頭書の賞が贈られました。」と記載された標識が立っている。

以前アメリカに遊んだとき、Holly hock という種子が販売されていたので、名前につられて購入したことがあった。その種子を庭に播種したところ、立葵が生育した思い出がある。

花言葉は、「豊かな実り」「気高く威厳に満ちた美」「野望」である。



景観賞と建設大臣章